

令和4年 **1**月の大阪森林便り



今月の木の話 **文化財としてのヒノキ**

*ヒノキは飛鳥・天平の昔から建築材として貴重視され、平安時代には貴族の扇にもヒノキ材が用いられていました。

*1993年、世界遺産として登録された「法隆寺地域の仏教建造物」、1994年登録の「古都京都の文化財」、1998年登録の「古都奈良の文化財」の中に有名な寺院が数多く含まれています。その建造物を今日まで支えてきた主役はヒノキ材です。

*伊瀬神宮では、1345年、1401年、1462年、1521年、1563年、1582年にかなりのヒノキ材が用いられたことが記録されています。

*ヒノキ材の利用が続いたことを考えると、天然記念物、巨樹古木の少ないことが理解できます。

*美しい光沢、柃目、硬軟中庸で工作がしやすく、しかも耐久性が抜群となれば、どの時代にも利用され立木として残してもらうことができなかったというのが真実でしょう。

(2008年発刊 (社)大阪府木材連合会・大阪木材仲買協同組合発行「天然記念物 巨樹・古木」より抜粋・引用)



「木の電池」で電球発光 **レアメタル不要**

日本製紙、スマホに利用目指す

*日本製紙が「木の電池」を使い電球を光らせることに成功。

*木質由来の原料を使い、需給がひっ迫するレアメタル（希少金属）を使わないのが特徴。

*木の電池の正体は、製紙原料「パルプ」から取り出した直径3ナ（ナは10億分の1）Mの繊維「セルロースナノファイバー」を使った蓄電体。

*日本製紙の電池は心臓部にレアメタルを使わず、日本国土の3分の2を覆う森林を活かせます。

(2021年12月7日 日本経済新聞記事より抜粋・引用)